はじめに

一八四八年、日本の農業技術書がオランダ人の手によってフランス語に訳され、パリとトリノで出版された。日本の開国後、来日した宣教師や医師たちもこの訳業に取り組んだ。蚕の伝染病が蔓延し苦しむヨーロッパに、救世主として注目されたのが日本産蚕であった。養蚕に関する知識が求められるが、これに応えられる日本語学者がすでにオランダにいたということに注目したい。そのころ、イギリスから琉球王国に渡り、琉球語と日本語の文法に関する論考を記す者、フランスから派遣され日本語を学ぶ宣教師らがいた。また、漂流を装い上陸し、送還先の長崎で密かに日本語を収集して帰国後にはアメリカで日本語語彙集を著した者もいる。時代は下り、浦賀沖で日本の開国交渉に臨むペリー提督は、あることに思いを巡らせていた。それは、日本語諜報員の育成であった。外国語の学習と言えば、現代は友好的で平和的なイメージをまとうことが多い。ところが、歴史を紐解くと、対立や征服、戦争といった国家間の交渉や紛争と連動して行われた例が多々見られる。西洋人の日本語研究とは、それを託された者が忠実に行なった成果であった。

日本語の学習は、その史実が日本書記にも記されているほど、国内では古くから行われていた。近世のアジアでは、日本語の通訳官も養成され教科書も編まれていたが、詳しいことはわかってない。一方、一六世紀に来日した西洋人は、計画的に日本語を学び、数多くの記録を残している。本書は、西洋人の日本語学習をとりあげ、推進の背景と学習成果にスポットを当てながら、一六世紀から二〇世紀半ばまでの史実を、八つのトピックのもとで紹介するものである。

執筆にあたり、言語の分野とともに、国際関係史や美術史、日本研究史などの諸分野の先学に導かれ、貴重な労作に多くを学ばせていただいた。先学の奥深さには驚嘆するばかりである。なお、筆者は、勤務校の授業で同様のテーマを扱ってきたが、本書はそれを一般読者向けに書き下ろしたものである。流れを概観することに重きをおいたため、個々の事例に詳しく立ち入ることはできなかった。かわりに、各章の主なトピックには、当時の人々の観察や声など言葉にまつわるエピソードも添えるようにした。

日本語は、かつて宣教師たちに世界で最も難しい言語と言われていたが、その日本語に挑戦する人々の冒険ドラマを通じて、言語の学習が内包する様々なことがらについて発見の機会となれば幸いである。